

## 『新 脱亜論』と東アジア共同体構想—ユートピアなのか？

兼田 麗子

### [要旨]

2008年5月に出版された『新 脱亜論』(文春新書)が注目を集めている。「昭和史の失敗を、二度と繰り返さないため、東アジア危機の日に備え、日本の近現代史を『再編集』する」ことを目的としたこの著作は「東アジア共同体に日本が加わって『大陸勢力』中国と連携し、日本の距離を遠くすることは、日本の近現代史の失敗を繰り返すことにならないか」、はたまた「近代日本の先人たちは極東アジアの国際環境をいかに観察し行動して、日本の独立自尊を守ったか。このことを日本の若者にどうしても伝えておきたい」と危惧している。この『新 脱亜論』を取り上げた記事や書評欄を見る限り、良好な受け取られ方をしているようである。

それでは、東アジア共同体構想は、『新 脱亜論』が指摘したように、果たしてユートピアなのだろうか。ユートピアは、トマス・モアが16世紀にギリシャ語の「どこにもない場所(ou topos)」から作り出した言葉であるが、本稿では、現在でも軽蔑的ニュアンスをもって使われることの多いユートピアを「食欲の入り込むことのないパラダイスのような社会であるが、非現実的な極端な理論であり理想に過ぎないもの」という定義でユートピアを使っていることを断っておく。

本稿は、東アジア共同体構想について概観した上で、福澤諭吉が唱えた「脱亜論」について簡単にふれた。そして、「己の欲せざるところは人に施すことなかれ」などの論語の言葉を人生の教訓とし、近代国民国家づくりの過程においても商業、実業への尽力を論語の文言で力説した渋沢栄一、および同様に経済界で大きな役割を果たした武藤山治、日韓併合の非を糾弾する文書も繰り返し執筆した柳宗悦のアジア観の特徴を考察した。さらには、現在までも維持されてきたという「脱亜入欧」的意識とアジア外交の不在論についてふれた。

その後、本題に戻り、東アジア共同体構想は非現実的であり、回避されなければならないと主張する『新 脱亜論』で掲げられている具体的な論点を3点に絞って説明した。こ

の際、『新 脱亜論』中の記述を忠実にたどることに力点を置くと同時に、2008年7月26日に拓殖大学で開催された著者の渡辺利夫氏による公開講演会での氏の説明によってもその特徴描写を補完した。その上で、『新 脱亜論』の3つの論点に対して異論を唱えることを試み、具体的なルールやシステムづくりについては専門家がふれている研究に存在するため、本稿は欠くことのできない相互信頼醸成に必要な試行、という点についてのみ改めてまとめた。